

(6) 昆虫類 ⑨ ラクダムシ目

ラクダムシ目昆虫は世界で180種ほどの小さな分類群である。ラクダムシ科とキスジラクダムシ科からなり、日本ではこの二つの科のそれぞれに1種ずつが知られている。しかし、今後、研究が進めば種が分割される可能性がある。特にキスジラクダムシについては、これまで得られた場所によりオス交尾器形態にかなりの差が存在するようで、種分割の可能性を示唆している（大原，1997）。また、ラクダムシについても、海岸の松林に生息するものと内陸部山地に生息するものでは形態に差がある可能性がある。

これまでのラクダムシ目昆虫の掲載種数の変遷をみると、初版と改訂版で1種、前版で2種となり、本書でも前版と同じ2種を掲載している。

ラクダムシ目の幼虫は樹皮下に生息し、樹皮下に生息する小昆虫を摂食して成長し、蛹を経て成虫になる。前胸部が異常といえるほど長い為、頭部を自在に動かすことが可能である。これは生きた虫を捕食するのに適応した形態であると考えられる。メスは長い産卵管をもつ。年1化で、初夏に出現する成虫は弱々しく飛翔する。

キスジラクダムシの生活史は未知だが、ラクダムシと同様な生活をしていると考えられる。

【付記】以下の種ごとの解説における形態や国内分布に関する項目は、大原（1997）などを参照した。

科名	ラクダムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	<b>ラクダムシ</b>	指定状況			
〔学名〕	<i>Inocellia japonica</i> Okamoto	-			
【形態】	体長10mm内外、翅開長15～20mm。黒色で前胸が長く、単眼を欠く。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	低地帯から山地帯にかけての、主としてアカマツを交えた林に生息する。しかし、最近の知見から、マツ類が混在した林でなくとも生息できると考えられる。				
【県内での生息状況】	川口市から秩父市（標高1,000m前後まで）にかけて点々と記録されているが、個体数は少ない（和田ほか，2008）。				
【特記事項】	幼虫は、マツの樹皮下に生息するとされていたが、スギやサクラの樹皮下でも記録されているので、従来言われているような松林のみに生息するものでもないと考えられる（塚口，1997；和田ほか，2008）。				

科名	キスジラクダムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	<b>キスジラクダムシ</b>	指定状況			
〔学名〕	<i>Raphidia harmandi</i> Navas	-			
【形態】	体長10mm内外、翅開長20mm内外。細長い体で、前胸が著しく長い。単眼をもつ。				
【国内分布】	本州、九州				
【主な生息環境】	標高1,000m以上の原生林、または原生林に近い植生の場所に生息する。				
【県内での生息状況】	現在のところ、秩父市の大滝地区川又、同入川（小赤沢）、同矢竹沢から記録されている（田悟，2014）。得られた個体数は極めて少ない。				
【特記事項】	幼生期の記録はないが、ラクダムシ同様、各種樹木の樹皮下で小さな昆虫類を摂食し、幼生期を過ごすものと考えられる。成虫は7月下旬に得られている。文献によれば、カエデ類やミズキの花に来ることもあるという（大原，1997）。				